

(1) 単元名： 心を見つめて読む 「5月になれば」

国頭村へき地新任教諭研修会

国頭村へき地教育研修会における授業参観。授業者のS先生は、24年度に赴任した2年目の教師である。前年度より村主催のへき地教育研修会も授業研究会に設定している。研修会の対象は、25年度の新任の先生方であるが、去年同様へき地校のほとんどの先生方が参加してくれた。これまでの普通規模の学校とはまず同じようにはいかない、理解できない。へき地校の特性と教師のジレンマがある。先生は子ども達にとって、「教師であり、大人であり、さらに1つの社会である。」この言葉もやがて理解できるようになるだろう。

へき地と言えども、教育を受ける権利は保証されないといけない。南の島の最北端のへき地で、教師たちの「一人残らずすべての子どもたちの「学び」の保証を」目指す挑戦が始まる。



☆文中の児童生徒の名前は全て仮名である。

【へき地5校の同僚性を高める】・・・奥小職員含め、24名の国頭村へき地校の先生方が集う。



初めて赴任された先生方にとって、複式の授業や、超少人数の授業は不安があつて当たり前である。2、3年目の先生方でさえ、自信を持って、「これです。」「こんなです。」なんて言える教師はいない。みんな不安や疑念を抱えながらも、子ども達と一緒に力を合わせて頑張っているのが現実である。大切なことは、その不安を一人で抱え込まないことである。校内で近隣校で互いに情報を共有し、支え合う同僚性が大切である。1、2回の授業を観ただけですぐに授業がうまくいくとは考えがたい。25年度始まりにあたり、村内へき地5校の教師たちが、「へき地教育における『真心』の教育」の追及に期待したい。

【読む 読み込む】・・・授業者は、本時の読みを全文音読にした。(教師の見取りとデザインでいい)



各々読み入るが、これまでかなり読み込んでいる様子がうかがえた。全文音読の後、学習課題の「いつ、気持ちが変わったのか？」ノートにまとめる(写真①)。各々ノートをまとめたら、ノートを交換し合いそれぞれの考えや思いを共有した(写真②)。



▲ 共有はしたが「学び」としての深まりが浅かった、やはり「対話」による、共有が大切にされたい。そのためには教師が関わる必要が生まれる。

【課題Ⅱ：「なぜ「五月になれば」にしたんだろう？】

さあ、「学び合い」が盛り上がるというより深まる(写真③)。疑問や思いが交わされる。子ども達はおおいに「語りたがっている。」を感じた。写真④、地図で北海道での物語の位置を確かめる。当然沖縄との気候の違いも語られる。



この後、子ども達のいろんな思いが語られる。

- ・「なぜ川に来る？」
- ・「川が好き？それともつりがすきな？」
- ・「川があるから…？」

素晴らしい子ども達のつぶやきである。これをどう活かすが教師の力量と研究である。



▲「学び」を促進させるファシリテータとしての教師の役割。聴くと言う基本姿勢から、仲間とつなぎ・事象とつなぎ、「学び」を深めたり、広めたりするのはやはり教師である。子どもの言葉には必ず心が隠れている。ただ「聞く」のではなく、分かってあげるために「聴く」という行為を大切にしたい。



【 子どもの変容 】

私は、この学年を3年間見続けてきた。何事にも順位が決まっている。みんなも知っている。去年の1学期まで、この集団はまさに、序列が固定化され、ある個人の解答をとりあえずまねて書く、が日常的だった。時には、自分の正解も消し隣の誤答を書き写すシーンさえ見てきた。しかし、去年の2学期あたりから様子が変わった。各々がそれぞれの解答や考えを持つようになったのである。「自分は自分の考えでいい。」この言葉に自信を持つということは、教科書や本では「話」として伝えることはできても個人の生き方として実践されていくことは難しく、教えられない。

学校における日常の「個の尊厳」が実践され、「自分は自分の考えでいいんだ。」「間違ふことは恥ずかしいことじゃないんだ。」学校における教師たちの「人を育てる」が、少しずつ少しずつ静かに「生きる力」となってこの子らの中に創りあげられている事実を感じる。今日も女の子は、必死に「自分の考え」を伝えていた。面と向き合い、少しばかりの気遣いで、しかし弱気にならず必死になって「語って」いた。うれしいの一言！ 正解、不正解などどうでもいい、どうしても評価を下したいのなら勝手に○でも△でもつけばいい。この子たちは評価されるために「学んでいる」のではない。このことだけは確かな事実として我々教師が受け止めていないといけないことである。当然、我々教師も指導者として、教師としてよい評価を得るために「学び」の研究をしているのではない。



【 モノの大切さ 】



写真⑥、ちょっとしたモノで子どもの心が動く、さわぐ。関心を示し、食い入るように集中する。言葉や文字よりもはるかに意欲を引き立てる。モノは大切である。

写真⑦、授業終末の「読み」である。さて、この読みの目的は何？ 終末の「読み」から教師が探りたい子どもの心は何？ 変容を探る？

【 授業終末の読み 】



【 研究協議 】・・・なぜか奥小での研究協議会は盛り上がる。不思議な空気が奥小にはある。



授業終了後の研究協議である。一通り授業者の説明が終わった後に、本日の授業を見ての感想や疑問。日常の自分の授業の振り返りや、不安が共有される。ほのぼのと深く、謙虚に厳しく。へき地5校の教師たちが日常を語る、「学び合う学び」について語る。小さな声でぼそぼそとまさに教師の学び合い。「まじな話、『学び』って何なの？」初めての教諭の率直で素朴な疑問である。周りの仲間が解答できたかどうかは確認できなかったが、本音で話せるこの空気を何よりも大切にしたい。「なにこれ。」「これでいいの。」「どうしよう。」「できるかな。」私だけでなく、すべての教師が一様に持っている不安・疑念なんです。安心してお話し下さい。

奥小学校S先生ありがとうございました。前年度より授業研究会に変えた研修会ですが、今年は誰に授業をお願いしようかと正直迷っていました。2年目でありながら、しかも、「授業はまだまだなんですが、僕のでよければ。」と授業公開を引き受けて下さった先生の勇気と優しさに感謝です。奥小学校の校長先生、教頭先生ほんとお世話になりました。やっぱり奥は自然の空気だけでなく、職員室の空気もいいですね。

へき地校の先生方全員が、ちょっと「安心」できたのではないのでしょうか。感謝です。

[ 研究協議会より ]

- ▲ 話は短く的確に話そう。時々聴いている人に目を向けて「聴いている側の様子をうかがう」が必要です。
- ▲ 質問への回答は、とくに的確に質問意外の余計なことに話がそれないようにしましょう。
- ◎ どんな言葉にも耐えられる強さを、あなたは持っていると思います。